

アーサー・コナン・ドイル作

伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izumo

第七章 スミス伍長の登場

読者の注意を引くために事件を歪曲したと思われたくないのです、これまでできるだけ余計な言葉を省いて事実だけを述べてきた。しかし、簡潔すぎるという印象を与えたとしたら、それまでにとんでもない出来事が立て続けに起こり、他の事を詳細に書く余裕がないくらい心を奪われてしまったためである。

そういう出来事に頭が占領されているときに、どうして退屈な管理人の仕事などに精を出せるだろう。家にじっとしていたり、のんびりボート遊びをしたりする気になれるだろうか。その四角く白い塔は、木立の間からぬつと突き出ていて、どこに行っても目についた。その下では、不運な家族が不安におののきながら、待ち受けているのだ。だが、何を？ 決まってその疑問に行き着き、思考はそこから先に進まなかった。

謎の多いヘザストーン家の問題は、ただでさえ興味を引くのに、命より大切な人の運命に関わっているとすれば、それが解決するまではとつてい他の事を考えられそうになかった。

そのうち、ナポリにいる地主から父に手紙が届いた。転地療養は非常に効果をあげていて、しばらくはスコットランドに戻るつもりはないというものだった。これはわたしたちの望むところだった。このブランクサムほど研究に適した所はないと思っっている父にとっては、都会の喧騒は耐えがたかっただろうし、妹とわたしにとっては、ご存知のとおり、どこにもましてウィグタンの荒野を愛さずにいられない理由があった。

この間、將軍とああいうことがあったにもかかわらず、いや、だからこそ、わたしは暇さえあれば日に二回はクルンバー館に足を向けた。そして、異状がないことを確認してはほっとするのであった。將軍は最初こそ、すごい剣幕でわたしに詰め寄ったものの、帰り際にはだいぶ心を許して、助けを求めさえしたのだ。わたしの立場は多少好転し、前ほどわたしの姿を見ても憤慨しないのではないかと思っただった。実際、あの二、三日後に將軍が敷地を歩き回っているとどこにも出くわしたが、この前の話にはまったく触れなかったものの、礼儀をわきまえた応対だった。

しかし、かなり神経が高ぶっているらしく、時々びくつとしたかと思えば、怯えた様子であったりを見回した。目はぎらぎらし、手は震えている。ガブリエルが言うように、十月五日を境にそれが治まらなければ、命がもたないのは目に見えていた。

例の逢引の場所を調べてみると、ゆるんだ横木は修理され、抜け穴はまんまと塞がれていた。他に入れそうな場所はないかと探し歩いたが、結局みつからなかった。

塀のあちこちにある隙間から、建物を覗き見ることはできた。一度、無骨な中年の男が一階の窓際に立っているのを見かけたことがあるが、たぶん御者のイスレール・ステークスだったのだろう。しかし、ガブリエルやモーターの姿はまったく目にする事ができず、わたしは、ひどく不安に駆られた。拘束を受けているのでなければ、わたしや妹に何らかの連絡をとるはずじゃないだろうか。二人から消息が途絶えたまま、日が過ぎていくにつれて、わたしの不安は募っていった。

それは、十月二日の朝のことだった。ガブリエルについて何か情報をつかもつと、館に向かつて歩いているとき、道端の石に腰掛けている男に気がついた。

近づいていくと、見知らぬ男で、埃まみれのぼろぼろの服からすると、かなり遠方からやってきたらしい。膝に大きなパンの塊を置き、折りたたみナイフを手にしていた。朝食を終えたばかりらしく、わたしを見るとパンくずを払って立ち上がった。

かなりの大男で、しかもナイフを手にしている。わたしが道のもつ片方に移ろうとしたのも不思議ではないだろう。こんな寂しい場所のこと、追いつめられた人間は何をするかわからないし、チョッキの金鎖がその引き金になるかもしれない。恐れていたとおり、男は道の真ん中で踏み出すと、わたしの行く手を遮った。

「おはようございます。何か御用ですか」わたしは努めて落ち着いた口調で言った。男の肌は風雨にさらされて赤銅色になり、口の隅から耳にかけてある深い傷跡は、人相をさらに凄みのあるものになっている。髪はだいぶ白いものが混じっていたが、体つきはがっしりしていて、帽子をあみだにかぶったところは小粋な兵隊に見えなくもない。どう見ても、今まで出会った浮浪者の中で一番危険なタイプだ。

男はむっつりと黙ったまま、しばらくこちらを疑わしそうな目でじろじろ見たあと、ナイフをかちりと音をさせて折りたたんだ。

「あんた、おまわりじゃないな。ちと若すぎる。ペイズリーでもウイグタンでも豚箱にぶち込まれたんだ。くそっ！今度、指一本でも触れやがったら、このルーファス・スミス伍長を甘く見るとどうなるか、思い知らせてやる！なんてえ国だ、こっちは仕事がないからその日暮らしなのに、ぶらぶらしてるからってぶち込むんだぜ」

「軍隊にいた方がそんな目にあうなんて、お気の毒です。どこの隊にいたんですか」「H砲兵中隊さ。軍隊なんかくそくらえだ！六十になろうつてのに、恩給は三十八ポンド十シリングぼつきり。ビールやたばこ代にもならねえってんだ」

「でも、それだけあれば結構やっていけそうですがね」

「あんた、本気でそう思ってるのかい」男はその日焼けした顔を突き出して、せせら

笑った。

「この刀の切り傷がいくらすると思つう？足は大砲に轢かれて、骨がたがた鳴るようになった。サイコロを入れた袋みてえにな。おまけに、肝臓はぼろぼろだし、東風が吹くと、おこりが出る。これは、いくらになる？その埋め合わせが、年にたった四十ポンドで十分だつて言つのかい？」

「こら辺に住んでいるのは、貧乏人ばかりですよ。金づるを探すなら、他を当たつたほうがいいでしょうね」

「どいつもこいつも、どあほうだ。馬鹿にしゃがつて」そう言つと、ポケットから黒いパイプを出して、タバコの葉を詰めた。「おれだつてな、まともな暮らしができりゃしてるさ。くそっ！ポケットに一シリングしかないときゃ、その使い方を心得てる。命がけで戦つたのに、国がしてくれたことといやあ、はした金をよこしただけだぜ。ロシアに行きや、ちつたあましかもしれねえな。ヒマラヤ山脈を超える道を教えてやるんだ。アフガン人もイギリス人も防ぎきれないだろうよ。サントペテルブルクじゃ、この情報はいくらになると思つう？」

「かりにも退役軍人だつた人の口から、そんな話を聞きたくありません。冗談だとしてもね」

「何が冗談なもんか！」男は声を荒げた。「むこうがその気になりや、とつくに実行していたとこさ。スコベレフは、最高だつたがね、死んじまつた。まあ、そんなこたあ、どうでもいい。あんたに聞きたかつたのはな、こら辺にヘザストーンつていう人がいないかつていうことなんだ。同じ四十一連隊の大佐でな。ウィゲタンで聞いたら、こら辺に住んでるつて話だつた」

「その人なら、向こつこのあの大きな家に住んでますよ」わたしはクルンバーの塔を指差した。「この道をちよつと行くと、門があります。でも、あまりお客を喜ばない人ですよ」

スミス伍長は、最後まで聞いていなかった。わたしが門を指差すが早いか、もう歩き出していた。それはなんと奇妙な歩き方だつただろう。右足を着くのは六回に一回だけ。それ以外は思いきり反動をつけて左足だけでピョンピョン飛びながら、驚くべきスピードで進んでいく。

わたしはあつけにとられて、その後姿を見送っていたが、突然不安に襲われた。この無遠慮な男と短気な将軍が出会えば、ただで済むはずはない。わたしは不恰好な鳥みだいに歩く男のあとを急いで追いかけ、門のところをやつと追いついた。男は鉄格子につかまって、薄暗い庭をのぞきこんでいる。

「なかなか抜け目ないな」男は振り向いて、わたしに館をあごでしゃくつてみせた。「悪知恵の働くお人だね。あれがやつこさんの家かい？」

「そうですね。でも、將軍と話すときは言葉を慎んだほうがいい。そういうことには我慢できない人ですからね」

「そのとおりだ。食べないやつだったぜ。おや、ありゃやつこさんじゃねえか？」
門の隙間からのぞくと、確かに將軍が足早にこちらに歩いてくるところだった。わたしたちの姿を見たか、声を聞きつけたのだろう。時々立ち止まっては、行こうかどうかどうしようか迷っているように、木々の影からこちらを窺っている。

「偵察してやがるー」わたしの連れはささやき、しゃがれ声でくっくつと笑った。「じいさん怖がつてんだ。何を怖がつてるか、おれは知ってるがね。罠にはまらねえように、できる限り用心してるってわけか」

そしていきなりつま先立ちになると、門の鉄格子の間から突き出した手を振って、がなりたてた。

「こつちです、隊長！こつちですよー異状ありません。敵の姿なし」

この言葉をきくと將軍はほっとしたように、わたしたちの方にやってきた。怒り心頭といった様子で、顔をまっかに染めている。

將軍はわたしに気づいて言った。「おや、ウエストさんじゃないですか。いったい何の御用ですか。どうしてこの男を連れてきたんですっ」

「こないかがわしいやくざ者と一緒にされてはたまらない。わたしはむっとして言った。「この人とは今そこで会ったばかりです。あなたのことを聞かれたので、道を教えてあげただけですよ」

「何しに来た」將軍は連れの男に向き直り、厳しい口調で言った。

「あの、恐れ入りますが…」伍長はさっきの人を食った態度をがらりと変えて、哀れっぽい声で言つと、うやうやしくモグラの皮の帽子に手をやった。「わたしは、退役した砲兵であります。インドにいるとき、閣下のお名前は存じ上げておりました。馬丁とか庭師とか、そのほかなんなりとわたしを使っていただきたく、参上しました」

「悪いが、役には立てんな」將軍はまったく取り合わなかった。

「わずかでも恵んでいただければ、飢えをしのごうことができます」まるで乞食のようにペこぺこ頭を下げた。「昔の部下をお見捨てになるわけじゃないですよね、わたしはあの峡谷ではセール旅団におりまして、カール占有のときは二番隊を勤めました」

將軍は伍長を鋭い目で見たが、一言も言わなかった。

「グズニーで地震が起きたとき、閣下の隊におりました。敵の城壁が崩れ落ちて、四万のアフガン人が射程内に入ったときです。お疑いになるなら、どうぞ何なりとお尋ねになってください。若いときは一緒に戦ってきたのに、今はどうです？片や、あなたは立派なお屋敷にお住まいになり、わたしは路頭に迷っている。これが公平と言えますかね？」

「厚かましいにもほどがある。立派な兵隊なら人に物乞いなどしないもんだ。お前のよつなやつにやる金はない」

「お待ちください」伍長は、背を向けて歩き出そうとする將軍に叫んだ。「わたしはテラダ峡谷にもおりました」

老人はびくつとして振り向いた。

「何？ ど、どういふことだ」

「あのテラダ峽谷にいたんですよ。あの男も知っています。グーラブ・シャーのこと
もね」伍長は急に声を落として最後の言葉をささやき、意地悪い笑みを浮かべた。

將軍はこれを聞いたとたん、門のところまで数歩後ろによろめいた。黄色いその顔は、
みるみる土気色に変わった。シヨックで口もきけない様子だったが、しばらくしてあえ
ぎながら言った。

「グーラブ・シャーだと？ おまえはいったい何者だ」

「よく御覧になってください。四十年もたつと、目もだいぶ悪くなられたようです
ね」

將軍は、この薄汚れた浮浪者を穴の開くほど見つめていたが、ふいに叫んだ。

「なんてことだ！ スミス伍長じゃないか」

「やっとおわかりになりましたね」そう言つと、伍長はクックツと笑つた。「いつに
なつたら気づいてもらえるか心配でしたよ。とにかく、この門をあけてくれませんか。
鉄格子をはさんと、話すのはいけませんや。ブタ箱の面会みたいで、気分が悪いです
からね」

將軍はまだ動揺しているようだったが、震える手で門のかんぬきをはずした。相手が
スミス伍長とわかつて、さぞ安心しただろうと思つたが、それほど歓迎していないこと
がありありと見て取れた。

將軍は門を開けながら言つた。「お前はまだ生きているのだらうかと考えることはあ
つたが、まさかまた会えるとは思ひもしなかつた。今までどうしていたんだ」

「どうしていたかお聞きになりたいですか？」伍長は吐き捨てるように言つた。「た
いがい飲んだくれてましたよ。金が続くうちは酒を飲んで、ささやかな幸せに酔つ。ま
た金がなくなると、酒代にありつくために放浪の旅に出る。それに、どこかでああなたに
お会いできるかもしれないと思つてましたしね」

「ウエストさん、こちらの話ばかりですみません」將軍は、帰ろうとしているわた
しの方に向き直つて言つた。「もつ少ししてもらえますかな。このことは、あなたもう
すうすう存知でしょ？ 最近は事情に通じていらっしやるようだし」

スミス伍長はあつけにとられて、わたしの顔を見た。「事情に通じているだつて？ ど
うしてそんなことになつたんです？」

「志願兵だよ、志願兵」將軍は声をひそめると、あわてて説明した。「この人は隣人
でね、わたしに何かあつたら助けてくれるとおっしゃつてな」

しかし、これを聞いて、さらに伍長は驚いた。
「へえー、これはこれは！ そんな勇敢な方がいるなんてね」伍長はわたしを感嘆の目
で見た。

「ところで、伍長、こつやつて会えたのはいいが、何がお望みかね？」

「何もかもでさあ。雨露をしのぐ屋根、服、食べ物、特にブランディーが飲みたいですね」

「わかった。できるだけのはしてやる」將軍はゆっくりと言った。「だがな、いかスミス伍長？秩序がなきゃいかん。わしは將軍で、お前は伍長。わしは主人で、お前は家来だ。それを忘れんようにな」

伍長は直立不動の姿勢になり、軍隊式の敬礼をした。

「庭師に暇を出して、お前を雇うことにしよう。ブランディーは適量なら許すが、それ以上はいかん。家には大酒のみはおらんからな」

「閣下は、アヘンもブランディーも飲まれないってことですか」

「何にも飲まん」將軍はきっぱり言った。

「ということは、わたしよりよっぽど肝がすわっておいでだ。反乱軍に勝ったのも不思議じゃないですね。毎晩のようにあれを聞くんじゃ、景気つけに一杯やらなきゃ、おかしくなっちゃいますよ」

將軍は、それ以上言つなというふうに片手で制した。

「ウエストさん、礼を言いますぞ。よくこの男を連れてきてくださった。こんな男でも、落ちぶれるのを見過ごすわけにはいきません。最初は本当のことを言っているかどうかかわからず、そっけなくしていましたがね。さあ、伍長、先に入っていてくれ、すぐに行くから」

「哀れなやつだ！」將軍は、ひよこひよここと並木道を歩いていく後姿を見ながら言った。「大砲の下敷きになって、足の骨が砕けてしまいましたな。頑固者で、医者に切斷させようとしなかった。あれでもアフガニスタンにいた頃は、りりしい若者だったが。あいつとはお互い妙な縁があつて…その話はいずれお話しすることになると思います。が…なんとか力になってやりたいと思つておるんです。やつは、わたしのことを何か言つていませんでしたかね」

「いいえ、何も」

「そうですね」何気ない風を装つてはいたが、明らかに安堵した顔だった。「いや、昔の話をお耳に入れたんじゃないかと思つてな。さあ、そろそろ戻つてあいつの面倒をみてやらにやなりません。あんなんじゃ、家の者が驚きますからな。では、失礼しますぞ」

將軍は手を振つて、背を向けると足早に男の後を追つた。わたしは高い黒塀の周りを歩きながら、隙間という隙間から目をこらしてみた。しかし、モーターとガブリエルの姿はちらとも見えなかった。

実は、このスミス伍長の登場こそが、恐ろしい終焉への序章になるのである。

これまで、わたしたちがウィグタンシアに来たいきさつから始めて、ヘザストーン家のクルンバー館への到着、最初にわたしと妹の興味を引き、後に一家へ強い関心を寄せるとなつた奇妙な出来事を順に記してきた。また、わたしたちがその家族と親密な

つきあいをするようになった事情も、簡単に触れた。

わたしがクルンバー館を觀察していた数ヶ月間に、館の内部では何が起こっていたのだろうか。ここでそれを知る御者のイスレール・ステークスに語り手になってもらおうと思う。

しかし、イスレールは文盲なため、ストーリーカークの長老教会のマシュー・クラーク牧師がその証言を筆記し、署名の代わりに×印をつけた文書を書せることにする。ただ残念なことに、牧師はあとから筆を加えてしまったらしい。多少読みづらくとも忠実に書き写していたなら、もっと面白いものになっていただろうに。といっても、イスレールの個性は十分伝わってくるし、ヘザストーン家に勤めている間に見聞きしたことの記録としても、信頼の置けることであることは間違いない。